

---

# 門下生と虚刀流と時渡りと

柴健

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

門下生と虚刀流と時渡りと

### 【Nコード】

N3819Z

### 【作者名】

柴健

### 【あらすじ】

これは刀語12巻のあとの物語り。 七花が 突然改竄される前の未来の日本にタイムスリップ。過去に帰るための手がかりを見つけると同時に一人の少年と出会う。そう、これがすべての始まりと知らずに。

時代劇ならぬ、現代活劇！刀語SSのはじまり、はじまり。  
作者の妄想炸裂ですが、それでもいい方はどうぞ。

## 序章、いわゆるプロローグ

西暦 20XX年

日本 京都

「ここはどこなんだ？」

青年は一人つぶやいた。

見てくれは、筋肉質の長身、ぼさぼさの長髪、女物の和服、だが十二単をさらに重ねたような派手なものだった。

青年の名は鑢 七花。

知る人は知っている、刀語の主人公である。

「否定姫はどこに行っちゃったんだ。探すのが面倒だ……。」

のんきなことをつぶやきながら青年は、

「待っていれば、あっちが来てくれるかもしれないから、久しぶりに修行でもするか……。」

この青年、どこまでものんきである。

話は変わり……

「ここが京都かー（嬉）」

こちらは一人の少年である。

こちらの見てくれは、中肉な体に、真面目そうな顔つきに、背中にリュックである。

「刀語の1巻の舞台になってるから、七花がいたりして・・・、ないか（悲）」

この少年、いわゆるオタクである。

少年は寺の奥に進んでいく、これがすべての出会いと知らずに・・・

## 序章、いわゆるプロローグ（後書き）

初めての作品ですが、読んでいただけたら光栄です

## 第一話 時すでに始まりを刻む

「お寺って神秘的だなー。」

そんなことをつぶやきながら少年は奥に進んでいった。

すると、だれもいないはずのところから声が聞こえる。

「……ん、誰か、いる？」

声がするほうに少年は進んでいった。

茂みに隠れながら少年は気付いた。

寺の前でだれかが修行をしている……。

ふと少年はその人物を見ながらある人物の名を思い出す。

「鑓……七花じゃないのかなあ？」

少年はのんきにつぶやきだす・・・。

この世にいるはずのない人物の名を・・・。

しかし、主人公にそう思わせたのは目の前にいる人物が叫んでいる台詞からだった。

「虚刀流、七花八裂！」

そう言つて、七花は空気に技を放ち続ける。七連続の華麗な技だった。

「かつ・・・かつこいい!!」 ガサツ

「・・・誰だ、あんた。」

「あつ。」

ばれてしまった！と少年はあわてた。

一方の青年は、冷静に構えをとっている。

右手を上、左手を下に、どちらも平手の形で。足は、右足を後ろ、左足を前に置き、相手に壁を作るような構え。

それはまるで、格闘ゲームの構えのようなものだった。

「虚刀流、一の構え……」 「鈴蘭っ!!」

少年は、青年、鑢七花の台詞をきれいに奪い取った、悪気は無く。

「あんた、なんで虚刀流の構えの名前を!？」

七花は少し、あわて気味に聞いてみる。

「そんなの刀語の基本中の基本じゃないですか!」

カタナ……ガタリ?なにそれ?

それはですね……と七花の疑問すべてに少年は答えた。

余談だが、七花が理解するまでたいへん時間がかかったのは、いうまでもない。

「そうか・・・、この改竄される前の日本の未来では、とがめと俺の一年間が小説になっていたのか。」

「すごい！七花さんのくせに、物分かりがいいですね！」

「・・・あんだ、すごく失礼だ。」

七花は呆れるように答える。

「ともかく、ここが違う世界ということは分かった。」

「うん、うん。」

「でも、どうやって帰るべきなんだろう・・・？」

何も手がかりはないのだ。七花は考える。

そこで少年は、

「なんかそれっぽいのないんですか？」と尋ねる。

そう言われ、七花は和服の中を探ってみた。

ひらり、と三つ折りの手紙が落ちる。

「・・・こんなものを入れた覚えがない。」

拾った手紙にはこう書かれていた。

己が過去に旅をした地に再び足を踏み入れよ、さすれば道は開かれる。しかし、条件がある。

・行く先々のどこかにある刀を見つけ出し、すべて破壊せよ。

・己が認めた門下生一人を連れていくこと。

それが貴様に課せられた、試練だ。

「……わけがわからん。」

「七花さん、なんて書いてあるんで……」ビュン！　ビュン！

「危ない！」

とつさに、七花は少年を小脇に抱え飛来してきた物体を避ける！

飛んできた物は……クナイだった！

「誰だ！出てきやがれっ！」

七花は気配のある茂みにに叫んだ。

その後、七花は少年に離れるように言った。

ザッ、と突然八つの影が七花を円を作るように囲んだ。

影の正体は、八人の忍だった！

しかし、ただの忍では無い。

なぜなら、忍の服装が七花が倒したことのある、真庭忍軍のものにそっくりだったからである。

「この時代には真庭忍軍がいるのか？」

「そんなことは無いはずです。コスプレならありそうですが。」

コスプレ？と七花は聞きたいところだが、生憎そんな暇は無い。

忍達の空気が殺気にあふれているからである。

七人までなら楽に倒せたが、八人なため七花も考えなければなら無いのだ。

この少年・・・一般人を巻き込みたくはないが・・・。

七花は忍の見た目に注目をし、観察をする。

忍の武器は、全員が日本刀である。

これなら、いける。

七花がそう踏んだ瞬間、忍達は一斉に襲ってきた。

しかし、一斉という単語は誤りである。

その内の一人は、少年に向かっていったのである。

助けたいが、こんなんじゃ絶対に間に合わない！

七花が諦めた次の瞬間、七花の予想は大きくはずれる。

少年は構えをとっていた。

そう、それはさっき自分が構えた虚刀流一の構え・鈴蘭と同じ構えだった。

「ガキがいつちよ前に構えなんかとってるんじゃねえよ!!」

一人の忍が怒声と共に少年に斬りかかる。

しかし、少年はそれをかわし、叫びと共に技を放つ！

一の構え・鈴蘭からはなつ、虚刀流の奥義のなかで最速の掌底！

「虚刀流、鏡花水月！！」

少年の技は、忍の鳩尾にはまった！

「ばっ、馬鹿なッ！！俺がこんなガキに・・・。」

「負けた台詞がお約束過ぎだよ（笑）」

忍は倒れた。そして、よそ見をしていた七花の周りの忍が叫ぶ。

「オラアッ！！よそ見てんじゃねえよ！！」

七人が一斉に襲ってくるが、七花には動揺の欠片もない。むしろ、

余裕だった。

「七人なら、俺にとっては丁度の人数だからな。あんたらには負ける気がしねえよ。」

七花も構えをとり、最終奥義を放つ！！

虚刀流には、七つ奥義があり、少年が放った掌底・鏡花水月、貫手による突き・花鳥風月、

飛び膝蹴り・百花繚乱、拳による突き・柳緑花紅、両手によるはっけい・飛花落葉、

両貫手で相手を斬る・錦上添花、前方三回転かかと落とし・落花狼藉の七つがある。

そのすべてを当てる技こそ、

「虚刀流最終奥義、七花八裂！」

七花は奥義の一つ一つを一人ずつに放った！

忍達は、ことごとく倒れていく。どうやら、下っ端だったようだ。

変体刀すべてをあつめた七花にとって、忍び達は余裕だった。

それより問題は、少年の使った技だった。

完璧とはいかずとも、虚刀流のそれだった。

「あんた、虚刀流を使えるのか？」

そう聞かれ、少年は答える。

「それっぽかったですか？実戦なんて初めてですけど（汗）」

「だから、どうして使えるんだ？」

七花は少年に再び尋ねる。

「それは刀語を読んで一人で修業したんですよ、虚刀流を……。」

少年は続ける、

「虚刀流に、七花さんに憧れて修業をしたんですよ、3年前から・・・。」

「そうだったのか・・・。」

知らなかった。

自分に、虚刀流にこんなに憧れを持っていたくれた人間を。

そして、七花はあることを思い出す。

『門下生を連れて旅をしなければならないことを』

虚刀流は一族直伝の流派なのだけれど、

それでも、七花は決めた。

「ところであんた、俺の弟子にならないか？」

「いいんですか!？」

七花はうなずく。

自分以外に、虚刀流が好きな人物がいることを

嬉しく思いながら。

「それではよろしくおねがいします、七花さん。いえ、七花師匠!」

少年は嬉しそうに、願っていたことのように歓喜に震えながら言の葉を紡いだ。

「ところで、あんたの名前をおれはまだ聞いていないんだが。」

そうでしたね。と少年は笑いながら答える。

「改めまして、僕の名前は柴花<sup>しばはな</sup> 健<sup>けん</sup>と言います。」

少年は自分の名を告げた。

「それじゃ、よろしく頼むよー健。」

こうして、恋人同士ではなく、師弟関係を築いて再び旅をすることになった七花。

このようにして旅の始まりは告げる。

「・・・・・・・・。。。」

茂みの中で見ていた人影の存在を知らず・・・

第一話 完

## 第一話 時すでに始まりを刻む（後書き）

読了お疲れ様でした。

第一話、満足のいく作品でしたか？

ちなみに、少年の名前はペンネームからとりました（笑）  
二話目も頑張るので、よろしくおねがいします。

## 人物紹介？

やすり  
鑢 七花 しちか

年齢：24歳

所属：虚刀流七代目当主

称号：虚刀流、日本最強（過去の世界において）、完了形変体刀  
虚刀・鑢

人柄：ぼさぼさの髪に、筋肉質の肉体、派手な女ものの和服、体中の傷。

刀語の主人公。性格は第一巻に比べると、とても人間らしい性格になった。

口癖は過去の相棒とがめにつけられた、

「ただし、その頃にはあんたは八つ裂きになっているだろうけどな。」である。

言われて傷がつく言葉は「花が無い」。

基本面倒くさがりだが、戦いでは相手を観察して戦うタイプである。

趣味：元々は「無趣味」であっただが、「地図作り」になった。

しばはな  
柴花 健 けん

年齢：17歳

所属：虚刀流門下生

称号：なし（増えていく予定）

人柄：短めのボブカット、中肉中背、真面目そうで温厚な顔つき。

性格は明るくて優しく、どんな人にも優しくできるお人好し。

第一話で七花に弟子入りをする。

マンガやアニメが大好きなオタクである。

刀語もその一つで、虚刀流を修行してたおかげで弟子入りを果たせた。

修行経験は中学三年のときからしているので3年間である。

趣味：「二次元鑑賞」、「虚刀流の修行」。

## 第二話 修業と団子と鹿せんべいと

旅をすることになった虚刀流七代目当主の鑓七花と、

虚刀流門下生となった柴花健は、

前回の神社の庭で修業中である。

「あんたはたしかに筋はいい。しかし、虚刀流の基礎はまるで駄目だ。」

最初からのダメだしである。

「それはたしかにそうですね（汗）」

「ということで、おれが手本をやってみるからあんたはそれを真似してみる。」

「わかりました、七花さん！」

この門下生、師匠と呼ぶ気はないらしい。

七花はそんなことを思いながら、虚刀流一の構え・鈴蘭を構える。

「まあ見ててくれ。虚刀流、鏡花水月！」

七花は空に掌底を打ち込む。

「それじゃ、やってみてくれ。」

「は、はいっ！」

健も一の構えを構えて、

「虚刀流、鏡花水月！」

「……………」

「どうですか？」

「いいんじゃないか。とりあえず合格だ。」

「ありがとうございますっ。」

健は、天真爛漫な笑顔で答える。

「それじゃ、そろそろ行くか。」

「はいっ！」

七花達は神社を後にした。

京都・街中

「未来になっても京都は変わらないんだな……。」

「昔の名残を残した街ですからね、京都は。」

二人は街中で京都の団子を食べながら喋っていた。

しかし、七花に目をとめるものは誰もいないのでのんびりと喋る。

「ところで、これからどこに行きます?」

健は七花に問う。

「まずは、不承島にいかないと始まらないからなあ・・・。」

「無いですよ、不承島。」

健は即答する。

それに対して七花は、

「・・・・・・はあ!?!」

七花は驚愕する。唯一の手掛かりがなくなってしまったことによつて。

現代には不承島はないのだ。

「これから一体どうするんだよ……。」

「そんなこと言われても（悲）……、まあ色々行ってみましょうっ！」

健は七花の不安をふっ飛ばすくらいの明るさで答える。

「……そうだな、歩いてみるか。」

健の気持ちを察したかのように、七花も気を取り直してとりあえず答える。

団子屋を後にして、七花達は手掛かり探しに出かける。

もちろん、勘定は健である。

七花は「仕事するべきかな」と、このとき思った。

そして二人は京都の町を歩き始める。

有名な神社はもちろん、さまざまな場所を歩いた。

「七花さん、七花さんっ！鹿が、鹿がああああああ！！」

健は鹿に鹿せんべいを与えたところ、鹿に噛まれた。という状況にある。

「・・・馬鹿なのか、あんた。」

一方の七花はそんな光景を見ながらも、のんきに返事をする。

七花は服に入れておいた本を取り出して、地図を書き込んでいる。

刀集めが終わった後に七花がとがめと約束したことである。

「京都はこんな感じと・・・って、うおお！？」

座って地図を描いている七花の周りには、いつの間にか鹿だらけだった。

よく地面を見ると、鹿せんべいの欠片が落ちている。

「あっははははっ（笑）」

健の笑い声が聞こえる。

おそらく、健の仕業だろう。

「助けてくれなかった仕返しです！」

「・・・面倒だ。」

内心では「楽しい」とか思いながらもそう答える。

――とがめにも見せてやりたかった。――

心の中で七花はそう思った。

とがめのことを懐かしく思いながら。

そんなこんなで二人とも観光気分で楽しんでいるのである・・・。

### 第三話 絶刀・鉋 改上

京都

宿屋で泊ったりしながら京都を観光。

京都の観光も普通に行っている二人・・・。

しかし、大事なことに気づいた。

「手がかり見つけてねーじゃん!？」

七花はツッコミをいれた。

「そーですねー・・・って、そうでした!」

のんきに返答と思いきや、しっかり返す健。

もはや、漫才の領域。

「うまいこと言っな、作者。」

「誰に言っているんですか？」

とこんな感じで物語は進んでいく。

「お寺とか、有名な大仏とかの場所にも行ったのですね（泣）。」

歩きながら健が答える。

すると、京都の街中にメイドカフェらしきものがあった。

「……………」

なにこれ？―七花の感想。

「……………」（汗）

いやな予感しかない……。

なぜなら看板には、

「メイドのコウモリ？」と書かれていたからだ。

「めいどの・・・こウモリ？」

七花は看板の字をそのまま読んだ。

そして七花は思い出す。

一月に戦った冥土の蝙蝠のことを。

―七花は納得した。

納得しないほうがいいのだけれど。

「なにかありそうですね・・・入ってみますか。」

健は不安げに七花に尋ねてみた。

「・・・そっだな。」

何も知らず、七花は適当に答える。

やむなく、二人はメイドカフェに足を踏み入れた・・・

「いらっしゃいませっ、ご主人様！きやは？」

可愛い和服のメイドがお決まりの挨拶をする中、

「・・・」

二人とも沈黙である。

「・・・健はこういうの慣れてそうだけだな。」

「・・・初めて来ましたよ。」

二人が会話を交えている中、一人の人物が店の奥から出てきた。

「なんだあ？お客様、ウチのメイドがお気に召しませんでしたかあ？きやはきやはっ！」

「「っ！！！！！！！」」

出てきた男は・・・変態だった。

なにしろ、男のくせにメイド服を着ているのだから。

変態以外のなにものでもないっ！

ところが、七花の反応は、

「あんた、真庭蝙蝠じゃないか・・・？」

「・・・・・・・・えっ！？」

あまりの事実に驚きを隠せない健。

「そうだけ。俺はこのメイドカフェ店長、真庭蝙蝠さまだ。ご主人、驚いたか？」

「そんなことより、あんたのその格好に驚きだ。」

「えっ、そこっ！？」

二人は普通に冷静である・・・らしい。

「ところで蝙蝠、あんた絶刀・鉋を持ってないか？」

七花は蝙蝠に質問した。

「ああ、あるぜあるぜ。俺の腹の中に。」

蝙蝠は淡々と答える。

「だったらその絶刀、譲ってくれないか？」

「まあ、そう急ぐもんじゃねーよ。」

蝙蝠は笑顔で答える。

―「嫌な予感しかない・・・」

「俺の名前は冥土の蝙蝠だぜ。冥土の土産はあまりも大盤振る舞いする接待好きの性格なんだぜ。」

「だから、メイドなんてやってるんですね・・・。」

一巻の台詞だなあとか思いながら答える。

「どうすればいいんだよ。」

「俺にとってはこーんな刀、別にいらねーからな。持ってきたければ持って行っていい。」

「・・・？」

「ただし、ただ渡すんじゃおもしろくねえからな・・・この店で遊

んでいけ!！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の沈黙にも容赦なく、

「さすが冥土<sup>メイド</sup>の蝙蝠<sup>フクロ</sup>だろ？」

「・・・蝙蝠<sup>フクロ</sup>がそう言うなら。」

七花は呆れ気味に答える。

「そうですね・・・。」

こうして、二人は蝙蝠の接待を受けることになった・・・。

「ご主人様、なにがよろしいですか？」

二人はテーブルのイスに座ってメニューを見ていた。

ちようどお昼だったので蝙蝠が、

「だったら最初は飯からだな、ご主人。」

と言ったからである。

「何食べます?」

「俺はおいしいならなんでもいい。」

珍しく七花は普通に答える。

「だったら、オムライスなんてどうですか?ご主人様。」

「おむ……らいす?」

七花は不思議そうに答える。

「七花さんはオムライス知らないんですね。」

「だから、おむらいすって一体・・・」

「まあ食べてみましょうよ。メイドさん、このケチャップ字付きオムライス二つください。」

「かしこまりましたっ！」

メイドはそう言って店の奥に行ってしまった。

「オムライスって何なんだ？」

「あのお客さんが食べてる黄色のやつですよ。」

そういつて七花は隣の席で食べている人を見た。

七花から見てもれば、黄色くて丸いものに赤いご飯が入っているとしか思えなかった。

（ご飯がなぜ赤いんだ・・・）

七花は謎の恐怖を覚えた。

「・・・面白い。」

健はそんな七花を見ながら言った。

「えっ・・・」

「ご主人様、オムライス二つです。」

そんな会話をしていたらオムライスが来た。

「文字は何が良いですか？」

「文字なんて書けるのか？」

「ハイッ。このケチャップで。」

そう言うとメイドは懷からケチャップを取りだした。

「なんだ・・・その赤いの？」

「調味料ですよ。」

七花にはさっぱり分からなかった。

「僕は、”刀語”をお願いします。」

「かしこまりました！。」

そういうと、僕のオムライスにケチャップで字を書いてくれた。

「・・・うまいのか、それ。」

「すこし酸っぱいくらいですよ。」

そうなのか。と七花は答える。

「それじゃ・・・俺も書いてもらおうかな。」

「何がよろしいですか？」

七花には特に思い入れのある言葉は無い。

しかし、七花はこう言った。

「”とがめ”で頼む。」

「かしこまりましたー。」

メイドに書いてもらいながら七花はこう思った。

ーとがめとも、こうして未来の食べ物を食べたかったー

今は亡きとがめのことを寂しく思いながら、

悲しく思いながら・・・

「七花さん、食べましょ。」

健は気を察したのか、静かに言った。

「・・・うまつ！」

七花にはおいしかったようです。

「よかったですね。」

こんな風に食事を楽しんだ後、いろんな事でも遊んで過ごした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3819z/>

---

門下生と虚刀流と時渡りと

2012年1月5日21時49分発行